

# 丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書



2017

姫路市教育委員会

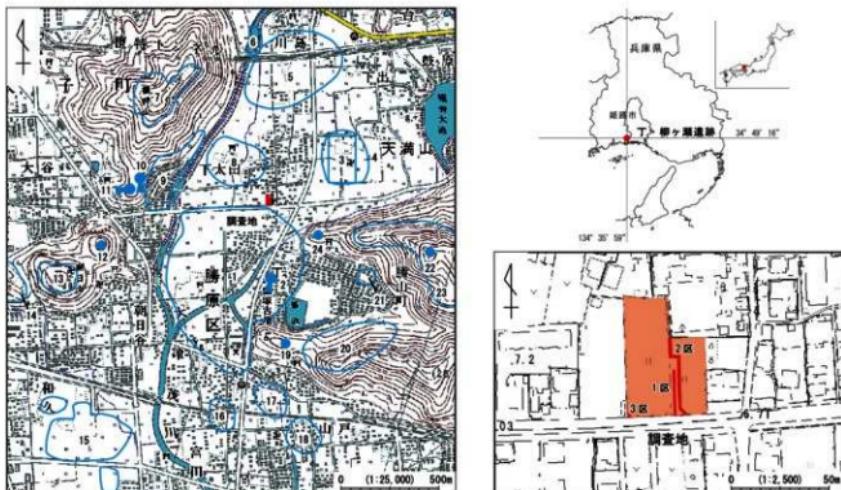
## 1. 調査に至る経緯

姫路市勝原区下太田字狭間 322 番 1 の一部他において、東洋住研株式会社による宅地造成工事が計画された。当該地は、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲外であったが、丁・柳ヶ瀬遺跡（遺跡番号：020327）に近接していることから、平成 28 年（2016 年）7 月 5 日に試掘調査（調査番号：20160149）を実施した。調査は、0.8 ~ 1.5m × 2m の試掘坪を 7 箇所、工事予定地内に設定し実施した。その結果、溝状遺構及びピット等を確認し、当該地に埋蔵文化財が存在することが判明した。このことから、保存協議を行ったうえで、包蔵地の変更手続きを経て本発掘調査を実施することとなった。調査期間は、平成 28 年（2016 年）8 月 4 日～8 月 20 日である。

調査は、東洋住研株式会社の委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。

## 2. 調査地の位置と周辺の遺跡

調査地にあたる姫路市勝原区下太田は、揖保川の支流である大津茂川の東岸に位置する。周辺には、国指定史跡瓢塚古墳をはじめ、山戸 4 号墳、櫛特山古墳など古墳時代前期の古墳が集中し、丁・柳ヶ瀬遺跡、川島遺跡、和久遺跡など市内を代表する集落遺跡も多い。また、近辺は、「播磨國風土記」の「大田里」に比定されており、「大田里」の項に記載のある渡来人伝承を裏付けるかのように、埋葬施設が穹窿式の横穴式石室である丁山頂古墳や、7 世紀半ばから後半の創建とされる下太田廃寺など、渡来人の関わりをうかがわせる遺跡も所在する。丁・柳ヶ瀬遺跡では、兵庫県教育委員会が昭和 55 年に実施した河川工事に伴う発掘調査において、主に自然河道跡から縄文時代から中世にかけての遺物が大量に出土し、市内でも存続時期が長い集落遺跡のひとつとして知られている。なかでも奈良時代の土器には、「大伴」と書かれた墨書き土器が出土しており、大伴連との関わりも指摘されている。



1. 丁・柳ヶ瀬遺跡 2. 瓢塚古墳 3. 下太田廃寺 4. ツクワ遺跡 5. 川島遺跡 6. 大津茂川床遺跡  
7. 櫛特山山頂遺跡 8. 下太田遺跡 9. 櫛特山遺跡  
10. 櫛特山 3 号墳 11. 櫛特山 1 号墳 12. 鶴山 1 号墳～3 号墳 13. 朝日山城跡 14. 朝日山遺跡  
15. 和久遺跡 16. 茶屋遺跡 17. 山戸遺跡 18. 南山戸遺跡  
19. 山戸 4 号墳 20. 山戸 1 号墳～18 号墳 21. 勝山町古墳群 1 号墳～5 号墳 22. 丁山頂古墳 23. 丁古墳群 1 号墳～5 号墳 24. 薬師古墳

図1 周辺の遺跡と調査の位置 (S=1:25,000 : 1:2,500)

### 3. 調査の成果

調査は、開発区域のうち、道路側溝、擁壁の一部及び下水道管の敷設範囲を対象として実施した。基本層序は、耕土、床土を経た現況地盤から約 30cm 下層の T.P. 5.9m ~ 6.0m で基盤層である黄色細砂層、灰黄褐色砂・粗砂層を検出し、この層の上面で古墳時代及び中世の溝、土坑、掘立柱建物跡、竪穴建物跡を確認した。以下、時代ごとに詳細を述べる。

#### ・古墳時代の遺構

土坑 1 基、掘立柱建物跡に復元できると推測される柱穴列 2 棟分、竪穴建物跡 1 棟、柱穴を検出した。

土坑 SK1 は、南北約 7.5m・東西 5.8m 分を検出したが、遺構が調査区外に延びているため正確な規模は不明である。深さは 0.5m 前後で、底の深さは一定ではなく、所々溝状の窪みを検出した。また、土坑の東南部及び西部の 2ヶ所で、土器集積を検出した。南東部を No.1、西部を No.2 とし、遺物の取り上げを行った。このうち No.1 は、南北 2m、東西 1.5m 以上の範囲で須恵器蓋・杯身・高杯・ハソウ・壺・甕・土師器杯などがまとまって出土した。須恵器蓋のうち 1 点（図 6-1）は、擬宝珠ツマミ及び端部に返りがつく形状で、7 世紀後半の時期があてられる。甕（図 6-12）は、口径が 49.2cm と大型で口縁から頸部にかけては 8 割以上が残存していた。体部から底部にかけて多くの破片があり、全体の復元が可能である。高杯（図 6-4・5）は長脚 2 段の有蓋高杯で、やや古い様相を示すものの、出土遺物全体の年代観及び出土状況から、故意に破碎して一括廃棄した可能性が高い。No.2 出土の土師器甕（図 6-9）は 1 個体に接合が可能で、口縁から体部上半が残存していた。時期は No.1 と同様と考えられる。

SK1 の下層から、周溝状のプラン及び水平に堆積する盛土層を確認した。のことから、SK1 は、竪穴建物跡の窪みを後世に利用したものである可能性がある。しかし、南北の長さが平均的な規模より大きいなどの疑問点が残ることから、更なる検討を要する。

掘立柱建物跡は、1 区の北端及び 2 区の南部で確認した。1 区の SB1 は、主軸を N-10°-E にとる。柱間は約 1.5m、柱穴の掘方は隅丸方形を志向し、一辺 50 ~ 60cm を測る。柱痕の直径は 15 ~ 20cm である。2 区の SB2 は、3.8m の距離を置いて、主軸を N-15°-W にとる柱穴列が 2 列平行に並ぶ。柱間隔は 50 ~ 70cm と狭く、柱穴の掘方は一辺 40 ~ 50cm の隅丸方形を呈する。基底部近くまで削平を受け、柱痕のみが残存する例もある。いずれも調査区の範囲が狭小であることから遺構の全容は不明であり、同一の建物を構成する遺構であるのかを含めて検討の余地を残す。遺構の時期は、出土遺物から古墳時代後期（7 世紀頃）の可能性があるが、細片であるため厳密な特定はできない。

このほか、溝 SD3 は、SB2 の北側柱穴列に平行して検出された。幅 18cm を測り、出土遺物は細片が出土したのみで明確な時期は不明であるが、遺構の切り合い、埋土などから古墳時代の遺構である可能性が高い。

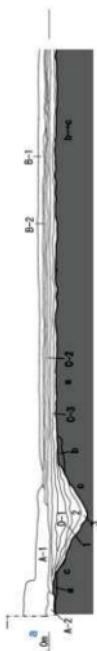
#### ・中世の遺構

SD1 は、1、2 区の南端で検出した。主軸を東西方向にとり、幅 2.2m ~ 3m、検出面からの深さ 60cm を測る。断面は V 字状を呈する。遺構の時期は室町時代以降であるが、遺物が細片であることから、明確な時期は不明である。柱穴は約 30 基を検出したが、建物跡を復元することはできなかった。時期は出土した土師器皿などから、鎌倉時代から室町時代頃に相当する。

### 4. 総括

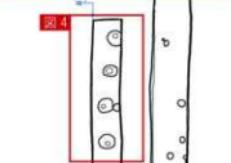
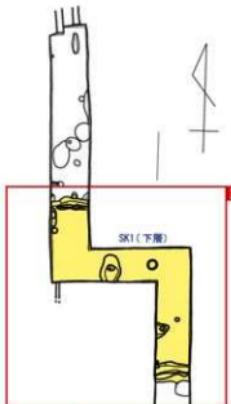
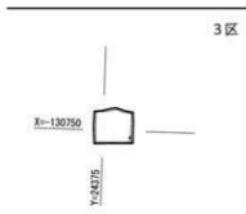
今回の調査では、古墳時代及び中世の遺構を確認し、丁・柳ヶ瀬瀬遺跡北辺の遺跡の広がりを確認することができた。調査地北端でも遺構を検出していることから、遺跡の範囲がさらに北へと続いている可能性が推察される。

図版 1

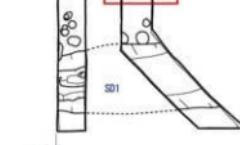
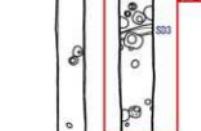


- A-1. 砂土 砂石  
A-2. 砂土 滅失層方  
B-1. 砂土 N/A/  
B-2. 砂土 N/S/  
C-1. 砂土  
C-2. 砂土  
D-1. 砂土 10YR5/1 細砂～中砂  
D-2. 砂土 2.5Y5/1 秒度じりシリシルト
1. 2.5Y5/1 ~ 4/1 秒度じりシリシルト  
→ 墓ブロック含む → SP1 墓土
  2. 2.5Y5/1 ~ 4/1 シルト混じり砂質土  
→ SP1 墓土
  3. 2.5Y4/1 ~ 10YR4/1 秒多量混じりシリシルト  
→ SP1 墓土
  4. 10YR5/1 ~ 2/1 粗砂 → SP10 墓土
  5. 10YR5/1 ~ 2/1 粗砂 → 墓ブロック含む → SP10 墓土

- a. 10YR6/8 シルト混じり細砂  
b. 10YR6/2 シルト混じり細砂～中砂  
c. 10YR6/2 シルト混じり砂質土



1区 2区

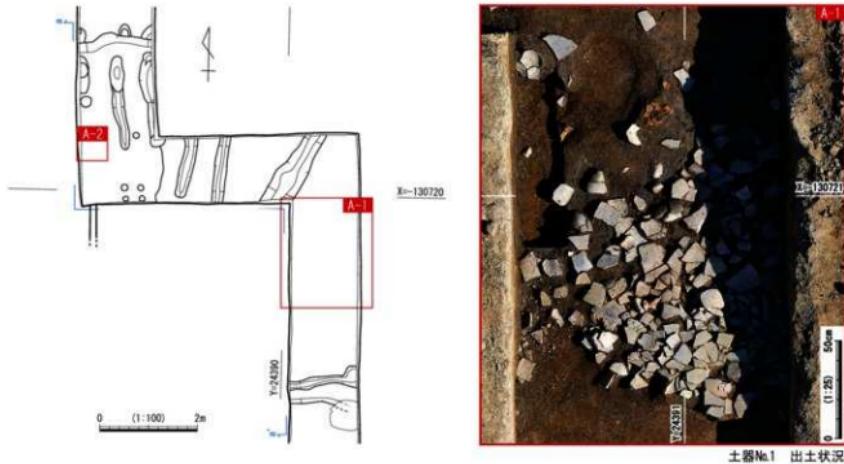


SK1 (下層) の範囲

X-130750 Y-24755 0 (1:200) 10m

図2 調査区平面図・断面図 (平面図 S=1:200 / 断面図 S=1:100)

図版2



土器No.1 出土状況

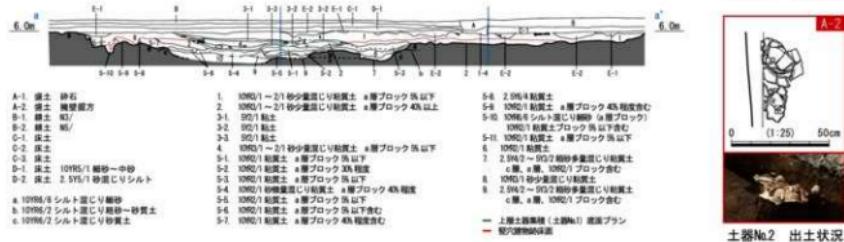


図3 2区SK1(上層) 平面図・断面図・詳細図 (平面図・断面図 S=1:100 / 詳細図 S=1:25)

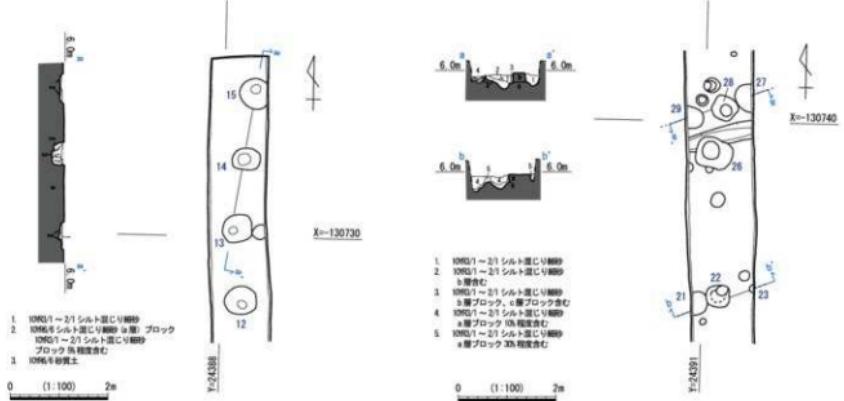


図4 1区SB1 平面図・断面図 (S=1:100)

図5 2区SB2 平面図・断面図 (S=1:100)

図版3

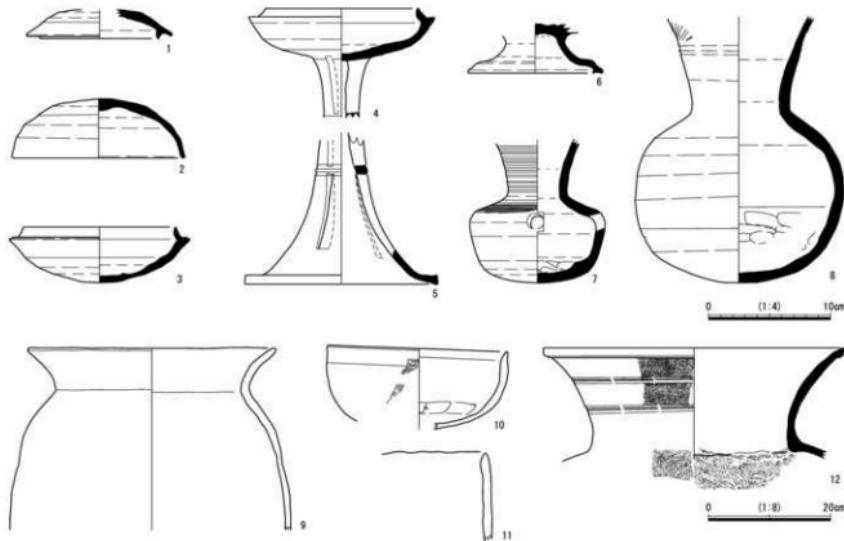


図6 出土遺物実測図 (1~11 S=1:4 / 12 S=1:8)

番号	種別	器種	出土遺構	口径	底径	基高	色調(外)	色調(内)	使用	地土	残存状況	調整(外)	調整(内)	
1	須恵器	壺	2区	SK1 土器 No.1	9.6	—	(2.3)	N7/	N6/	普通	φ1mm以下の砂粒をわずかに含む	ロクロナデ 頂部・底部回転ヘラ削り	ロクロナデ	
2	須恵器	杯盤	2区	SK1 土器 No.1	14	—	4.9	N7/	N7/	普通	φ1~3mmの砂粒を多く含む	ロクロナデ 底部・底部回転ヘラ削り	ロクロナデ	
3	須恵器	杯身	2区	SK1 土器 No.1	12.5	—	4.5	N7/	N7/	普通	φ1~2mmの砂粒を含む	ロクロナデ 底部回転ヘラ削り	ロクロナデ	
4	須恵器	高杯	2区	SK1 土器 No.1	—	15.8	(12.4)	N7/ ~N4/	N7/	普通	φ5mm以下の砂粒を含む	脚部	ロクロナデ 体部下半段射状の擦ハケ	
5	須恵器	高杯	2区	SK1 土器 No.1	13.6	—	(8.5)	N7/	N7/	普通	φ1mm以下の砂粒を含む	杯部から脚部上半 ロクロナデ 底部回転ヘラ削り	ロクロナデ 脚部・脚ナデ	
6	須恵器	高杯	2区	SK1 土器 No.1	—	10.9	(4.0)	SYB/1	SYB/1	普通	φ1~3mmの砂粒を含む	脚部	ロクロナデ	ロクロナデ
7	須恵器	ハコノフ	2区	SK1 土器 No.1	—	—	(11.7)	N7/ ~N8/	N7/	普通	φ1~3mmの砂粒を多く含む	ロ縁部欠損 底部回転ヘラ削り	ロクロナデ	
8	須恵器	壺	2区	SK1 土器 No.1	—	—	(21.8)	N6/	N6/	普通	φ3mm以下の砂粒を含む	ロ縁部から体部の1/4程度 底部回転ヘラ削り	ロクロナデ 底部タキ出し指サエ	
9	土師器	壺	2区	SK1 土器 No.2	20	—	(14.9)	10YR8/2	10YR8/3	軟質	φ4mm以下の砂粒を多く含む	ロ縁部から体部の上半 底部欠損	不明	不明
10	土師器	杯	2区	SK1 土器 No.1	14.7	—	6.9	7.5YR8/4	7.5YR8/4	普通	φ4mm以下の砂粒を多く含む	底部欠損 羅ハケ	ロ縁部・横ナデ 底部・板状工具によるナデ	
11	土師器	鉢	2区	SK1 土器 No.1	—	—	(7.2)	7.5YR8/6	10YR7/4	やや軟質	φ1~5mmの白色、黒色粒を含む	ロ縁部1/6	不明	不明
12	須恵器	壺	2区	SK1 土器 No.1	49.2	—	(18.0)	N4/	N5/	普通	φ1~3mmの砂粒を少量含む	ロ縁部~底部 底部・平行タキ	ロクロナデ 体部・同心円 底部・平行タキ	

※口径、底径、基高のうち、( )内の数値は、残存値である

表1 遺物観察表



写真 1 SB1(SP13, 14, 15) (北から)



写真 2 SB2(SP27, 28, 29) (北から)



写真 3 SP14 断面 (西から)



写真 4 SP27, 28 断面 (北から)



写真 5 2区 SK1 下層 (東から)



写真 6 2区 SK1 断面 1 (東から)



写真 7 2区 SK1 断面 2 (北から)



写真 8 2区 SK1 断面 3 (東から)



写真9 出土遺物 ※数字は図6に対応

報告書抄録

所收遺跡名	所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
よろ・やながせいき 丁・柳ヶ瀬遺跡	兵庫県姫路市勝原区 下太田字狭間322番1の一部地	28201	020327	34度 49分 16秒	134度 35分 59秒	2016.8.4 ～ 2016.8.20	78m <sup>2</sup>	宅地造成
所收遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	調査番号			
丁・柳ヶ瀬遺跡		古墳時代	堅穴式建物跡、 獨立柱建物跡、 土坑、溝	須恵器、土師器	20160232			
		中世	溝、柱穴	須恵器、土師器、陶器				

- 例言 -

- 1 本書は、姫路市勝原区下太田字狭間322番1の一部地に所在する丁・柳ヶ瀬遺跡(遺跡番号:020327)の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、東洋住建株式会社の委託を受け、姫路市教育委員会が実施した。地形調査及び整理作業、報告書の編集は姫路市教育委員会生涯学習部埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 発掘調査平面図は世界測地系を使用し、方位はすべて座標北である。また、標高は東京湾平均海準水準(T.P.)を基準とした。
- 4 土層名は、農林水産省農林水産技術会事務局・財團法人日本色彩研究所監修「新版 標準土色帖」(1999年度版)に基づいた。
- 5 本報告書に記載する遺物、写真・図面等は、姫路市埋蔵文化財センターで保管している。

姫路市埋蔵文化財センター調査報告 第52集

丁・柳ヶ瀬遺跡発掘調査報告書

編 集 姫路市埋蔵文化財センター

〒671-0246 兵庫県姫路市四郷町坂元414番地1

発 行 姫路市教育委員会

〒670-8501 兵庫県姫路市安田四丁目1番地

発行日 平成29年(2017年)3月31日

印 刷 松尾印刷株式会社

〒671-0222 兵庫県姫路市別所町小林494